

〔紹介〕

佐藤泰正編『中原中也を読む』

中原 豊

本書は、二〇〇五年五月から七月にかけて開催された第68回アルス梅光小倉公開講座（主催・梅光学院生涯学習センター、会場・北九州市立男女共同参画センター「ムーブ」）において、「中原中也とその時代」をテーマにして語られた講演内容に基づき、論考を中心に構成されている。執筆者は、梅光学院大学の教員で、いずれも中原中也の研究者である佐藤泰正、北川透、中野新治、加藤邦彦の各氏、中原中也記念館の福田百合子館長と中原豊副館長（本学会会員）、『新編中原中也全集』の編集委員であった京都大学の宇佐美斉氏の七名の講師に加え、同じく編集委員であった詩人の佐々木幹郎氏が執筆のみで参加している。

八名の執筆者の中也に対するアプローチやその語り口は多様である。佐藤氏「中原中也をどう読むか——その〈宗教性〉の意味を問いつつ——」と中野氏「中原中也 あるいは 魂の労働者」は、それぞれ〈宗教性〉〈労働〉という視点から中也において詩人とはどういう存在であったか、詩とは何であったかという本質的な問題に真摯に取り組んでいる。北川氏「〔無〕の軌道」を内包する文学——中原中也と太宰治の出会い——と中原「亡き人との対話」——宮沢賢治と中原中也」は、他の文学者やその作品との比較という観点からのアプローチであり、先導者であった賢治作品の中也へ影響、

中也没後も戦中戦後を作家として生きた太宰の作品に対する中也の詩の影響を通じて、それぞれの個性や時代を浮き彫りにしようとする。執筆者の多くが山口県在住だが、とりわけ福田氏の「山口と中也」は中也の故郷に生まれ育った氏ならではの視点から詩と故郷の関係を迫る。宇佐美氏「中原中也とランボー」は、氏が全集編集に携わった経験をふまえながら、中也のランボー理解の深さを平明な口調で語り、同じ経験を持つ加藤氏「ゆらゆれる『ゆあーん ゆよーん』——中原中也『サーカス』の改稿と行の字下げをめぐって——」は、全集の解題篇さながらの丹念な推敲課程の追跡に基づいた考察が特徴的である。冒頭に置かれた佐々木氏「『全集』という生きもの」も、第一次資料に向き合い続けた経験を踏まえ、テキストクリティックを怠りがちな近代文学研究者の倨傲に警鐘を発し、その時点で可能な限り正確な書誌情報が後世へ伝えられていく過程にひとつの〈物語〉を見出している。

中原中也という詩人やその作品を知るばかりでなく、文学研究の方法やそのあり方について考えるためにも示唆に富む一冊となっている。

〔中原中也を読む〕笠間ライブラリー梅光学院大学公開講座論集
54 笠間書院 二〇〇六年七月刊 全一八五頁 一〇〇〇円